医療系研究科論文博士用

学 位 論 文 要 旨

氏 名 安部 学朗 印

論 文 題 目

Brain MRI in patients with acute confusional state of diffuse psychiatric/neuropsychological syndromes in systemic lupus erythematosus

（全身性エリテマトーデスの急性昏迷状態における脳 MRI 所見について）

指 導 教 授 承 認 印
廣畑俊成 印

論文タイトル

Brain MRI in patients with acute confusional state of diffuse psychiatric/neuropsychological syndromes in systemic lupus erythematosus

（全身性エリテマトーデスの急性昏迷状態における脳 MRI 所見について）

氏名　安部　学朗

論文要旨

【諸言】

全身性エリテマトーデス(SLE)は，様々な自己抗体を特徴とする自己免疫性疾患であり，中でも精神神経症状は予後を左右する難治性病変である．1999 年にアメリカリウマチ学会が SLE の精神神経症状を Neuropsychiatric SLE(NPSLE)と呼称することを提唱し，19 の症状に分類している．その内訳は，12 の中枢神経系病変(diffuse NPSLE)と 7 の抹消神経系病変(focal NPSLE)）である．MRI は，NPSLE を含む中枢神経病変の描出に有用である．NPSLE の中枢神経病変の患者達に頭部 MRI 画像の異常がある患者では，異常がない患者と比べてより重症な中枢神経の炎症があると報告されている．しかしながら中枢神経病変の中の急性錯乱状態(Acute confusional state：ACS)だけを対象として，頭部 MRI 画像の異常がどのような影響を与えるか調べた報告はない．ACS は SLE の中でも重症な病態である．そこで我々は ACS と MRI 所見の関係性を明らかにするたことを目的とした．

【目的】

これまでに NPSLE における ACS の患者と MRI 画像所見の特徴について述べた論文はない．この研究の目的は，ACS と頭部 MRI 画像の異常所見との関係性や臨床的特徴を明らかにすることである．

【方法】

1992 年から 2015 年の間に北里大学病院と帝京大学附医学部属病院に入院した 36 名の ACS の患者が対象である．すべての患者はアメリカリウマチ学会の 1982 年の分類基準を満たしている．また 1999 年の NPSLE の分類に従って ACS に分類された患者である．診療録を参照し臨床的特徴と頭部 MRI 画像の関連を後ろ向きに検討した．

【結果】

ACS の 36 例中 18 例の患者に頭部 MRI 画像の異常が見られた．頭部 MRI 画像の T2 強調画像，あるいは FLAIR 画像において，18 例中 15 例で大脳白質に大小様々な高信号域が見られた．MRI 画像の異常所見を有していた症例で治療後も画像の経過を追うことができた 14 例中 12 例は，治療後に大脳白質病変の改善を認めた．MRI 画像の異常の有無と ACS 発症時の年齢，SLE の罹病期間，抗 DNA 抗体の有無，抗リン脂質抗体の有無，抗リボソーマル P 抗体の有無，血清と髄液

中の IL-6 濃度，抗 Sm 抗体の有無について関係を調べた．抗 Sm 抗体を除いた上記の臨床的経過や検査所見は，頭部 MRI 画像の異常所見の有無と関連がなかった．抗 Sm 抗体の陽性率は頭部 MRI の異常所見がある群で有意に高かった（P=00067）．MRI 画像の異常を有していない 18 例で，死の転帰を辿ったものはいなかったが，MRI 画像の異常を有していた 18 例中 8 例が SLE そのものの活動性も高く死亡した．これらのことから，頭部 MRI 画像の有無は予後と密接に関りがあると考えられた(p = 0.0013, HR =10.36 [95% CI: 2.487-43.19]).

【結論】

本研究において，頭部 MRI 画像の異常を有する ACS の患者はより重症であり，予後が悪いことを示した．さらに抗 Sm 抗体は ACS の患者において頭部 MRI 画像の異常所見と関係があることを示した．

出典：Mod Rheumatol. 2016 Jun 20:1-6. [Epub ahead of print]　PMID:27319397